

宇宙美容原論

石 田 かおり*

The Space Beauty Culture Principles

Kaori ISHIDA*

Abstract

Now that space development of humankind has begun in earnest. Research and development of space cosmetology and space beauty industry are urgent matter. When you think of cosmetology, you might think of women's makeup, but that's just part of cosmetology. Regardless of age, gender, or culture, there are many beauty culture and products in human daily life, but many of them are unconscious because of their customary. For example, face washing, teeth brushing, hair setting, shaving, nail clipping, bathing, hair washing. Cosmetology is indispensable for healthy and cultural life of humankind, whether it is space travel or future space migration. For the research and development of space cosmetology philosophical experts must participate in creation of space beauty culture, at the beginning of foundation of space beauty culture. Now is the time. In this paper, we will clarify the configuration and constellation of research and development of space beauty culture for making of "The Space Beauty Charter", on that all research and development of space beauty culture are based.

At first, we will confirm that cosmetology is a human culture. So space beauty culture plays a part in the creation of human culture in the space. Next, we will clarify that human beings are "*homo cosmeticos*" by philosophical methods. It becomes clear that beauty culture is a fundamental factor of existence of human being, which is directly linked to the formation of self-image and identity. The third, from the etymology of the word beauty culture, we will confirm that beauty culture and the universe are directly connected. Finally, we will draw an overall picture of the research field of space cosmetology and clarify the necessity of the making "The Space Beauty Charter" and its indispensable principles.

1 宇宙美容研究の動機と目的

新型コロナウイルスのパンデミックにもかかわらず2020年頃から、ビジネス界から宇宙産業への本格的な参入が加速し、各種メディアによ

る報道が急増した感がある。例を挙げれば、2021年4月23日（日本時間）に打ち上げられた国際宇宙ステーション（ISS）に宇宙飛行士を運ぶロケットは、初めて民間企業が開発したも

*人間総合学群 人間文化学類

のである。このとき宇宙飛行士が着用した宇宙服は、民間人の宇宙旅行を視野に入れたデザイン変更により、従来のものに比べて印象が一変した。また、2021年には世界的に著名な実業家（大富豪でもある）が自社開発の宇宙旅行の最初の旅行者になる例が2件発生した。（注1）最大約10分間、近宇宙に出ただけの宇宙旅行で、この論文執筆時点では宇宙旅行の多くは価格が1500万円～3000万円程度（日本円換算）、中には億単位のものもあり、いずれにしても大富豪でない限り手が届かない。しかし、あまり遠くない未来には旅行の1つとして多くの人の選択肢になることが予想され、それゆえ宇宙旅行への企業の参入が進んでいる。こうした短時間の宇宙体験は、今後深宇宙に長時間滞在する本格的な宇宙旅行実用化の道を開くものである。アメリカでは国家を挙げて火星移住研究に取り組んでいる。実施されたのはまだ火星の環境探査と、閉鎖空間での居住実験（地球上の実験）程度だが、明確な計画があり、それに従って一歩ずつ成果を挙げている。宇宙旅行や火星移住も含めて、宇宙空間で人類が長期間滞在するために必要な条件を整えるための研究と、開発された技術の実用化は、現実に世界各国で進展中である。たとえば月を宇宙生活に必要な物資の生産拠点とする研究では、日本の研究チームが世界をリードする技術開発に動いている。月で野菜を栽培する技術は、東京駅付近のビルの中で野菜を栽培する技術と共通点が多く、知らぬ間に日常生活の中に宇宙開発技術から生まれた技術の恩恵が入り込んでいる。

このように人類の宇宙進出が子供の未来の夢の域から脱して現実味を帯びた背景には、技術開発と同時に資金と人材も含めて産業界の参入が大きい。各種の企業が大切な資金と人材を宇宙産業に投入し、収益のチャンスを賭けて真面目に取り組むようになった。もはや宇宙で暮ら

すことは遠い子孫の代にいつか実現するだろう夢にとどまらず、近い未来の現実になったと言えよう。こうしたことから、「人類が宇宙で生活するのに何が必要か」、このテーマを真剣に考えることが、既存の産業の生き残り策や市場拡大の重要な課題になった。それと同時に、このテーマが新しい起業のチャンスにもなっている。さらに、昨年以來人類にとって未知だったウィルスのパンデミックにより危機に瀕する企業が急増していることも、事業転換先や投資先として宇宙参入を加速する要因になっていると考えられる。

こうした現在の状況を鑑みると、ここに「宇宙美容」の立地の余地と必要性がある。筆者は30年間哲学（現象学）という方法で化粧文化・美容文化の研究を行ってきた。その経歴と知見をいまもっともいかすことができる道が宇宙美容にあると考えて、この論文では宇宙美容とはどのようなものであるか、もっとも基礎となる宇宙美容の考え方を示すことにする。

2 美容は文化である

まず、始めに、美容は文化であることを確認しておく。

たとえば『広辞苑』に記載されている「文化」の定義は、次のようなものである。（注2）

人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住を始め、科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。

このほか複数の国語辞典や百科事典（英文含む）に当たったが、上記の内容はいずれにも共通して見られた。美容は、こうした事典類の「文化」の条件項目をすべて満たしている。たとえば美容に使う化粧品の原料は自然から採取した

ものであるし、美容を加える人体も自然の一部である。また、美容は生活形式の様式と内容に従って行われている。

美容は文化であることを確認するためにこれだけでは心許ないと考えるなら、文化についての専門家の定義を探り、照合する作業を進めよう。文化の定義として学術の世界に最も影響力があるものは、エドワード・タイラーの説ではないだろうか。そちらも確認しておこう。(注3)

文化あるいは文明とは、その広い民族誌学上の意味で理解されているところでは、社会の成員としての人間 (man) によって獲得された知識、信条、芸術、法、道徳、慣習や、他のいろいろな能力や習性 (habits) を含む複雑な総体である。

タイラーの定義のうち、「社会の成員としての人間によって獲得された習慣」「習性」という箇所が特に美容に当てはまっている。

朝起きてから夜就寝するまで、多くの人が行う1日の行動の中にある美容を洗い出してみよう。朝は洗顔、歯磨き、整髪、人によっては髭剃り、メイクがある。日中は、昼食後の歯磨きや化粧直しがある。夕食後から就寝までの間は、歯磨き、洗顔、入浴、洗髪がある。このほかに、爪を切ったり鑿で削ったりすることや、髪を切ることも、多くの人々が定期的に実施している。染毛、パーマ、ネイルアート、脱毛、植毛・増毛もかなり普及している。これらの美容は日常生活の中に組み込まれ、しかもその半数以上は生活習慣として無意識のうちにに行われていることが、こうして改めて振り返るとわかる。「人類とは、毎日美容行為を繰り返して生きている動物である」と、ヒトの新しい定義ができるくらいだ。こうした日常的な美容行為は、生まれ育った環境によっていつの間にか刷り込まれ、

毎日繰り返すことで無意識のうちにできるようになってしまったものが多い。それはすなわち、所属する社会集団の文化を学び習得し、次世代に伝承して行くことでもある。

このように、各種の事典や研究者による文化の定義に照合すれば、美容は文化であることがすぐにわかる。しかし、美容を文化ととらえるような社会的認識は存在しない。とくに日本の社会では、「文化」は高尚なものを指し、そうでない文化を「大衆文化」と呼ぶならわしがあるが、美容はそのいずれにも所属するとは考えられていない。いや、正確な言い方をすれば、そもそも美容が文化であるか否かを真面目に検討されたことがない。それゆえ「文化」にも「大衆文化」にも美容が該当するかどうかを検討するという発想がそもそもない。「美容」と「文化」を結び付けて考えてみようという発想すらない。これは、筆者がほぼ30年間携わっている化粧と文化の関係と全く同じものである。化粧は美容の一部で、集合論を借れば部分集合である。化粧を包摂する美容そのものがそもそも文化と結び付けて捉えられたことがなければ、部分集合である化粧も同様であることは、論理学を持ち出すまでもない。こうした実態があるために、宇宙美容基礎論の始めに改めて、美容は文化であることを確認する意義がある。

3 宇宙美容の必然性

人類の美容は自然発生的に発生した可能性が否定できない。美容行為は、いつ、どこで、だれが、何を、始めたのか不明なものがほとんどである。美容に使われるアイテムの考案者ですら明確にわかっているものは極めて少ない。政治的あるいは経済的に重要だと認識された出来事は記録が残りがやすいが、反対に美容は文化であるか検討することもなかったため、資料がないからである。さらに、文字を持たぬ太古の昔

は記録手段がなく、さらに美容は皮膚・毛髪・爪といった人体の表面を占める部位に施すものであるため、美容行為の当事者が死亡した場合に短期間のうちに消失してしまう。古代エジプトのミイラやアイスマン（注4）のように、皮膚があまり損傷されていない状態で古い時代の遺体が残っている場合には、美容行為の痕跡を見つけることができるかもしれない。しかし、たとえば古代エジプトのミイラは王族という特別な身分の人間であり、そこに残る美容の痕跡もまた特別な人物の範囲でしかない可能性がある。ミイラが作られた当時の一般大衆の美容は推察すらできない。このように資料がないことから不明なことの多い美容ではあるが、衣食住という生活の基本三要素が存在している時代と地域であれば、美容行為も必ずそこに存在していることは確かである。美容は人類の生活文化の一端を担い、人類の文化において美容は時間的・空間的普遍的なものである。

こうしたことから、人類が宇宙進出を図れば、美容も同時に宇宙進出となることは必然である。始めにこのことを明確に確認しておきたい。

3 宇宙美容の目的

人類は何を求めて、何が目的で、美容行為を行うのであろうか。日本語で美しい容姿を表す「美容」、英語や仏語では美を表す beauty, beauté などのように、美容は美を求める行為という認識が世界共通である。「美」という人類に特異的に見られる価値観を自身の身体で再現すること、それが美容の目的であると一般的に言われている。美は各種の価値の中でもっとも高位の価値の1つとして歴史上存在し続けてきた。たとえば古代ギリシャでは、「善美（カロカガシア）」（注5）と言って、美は善と一体化しており、善美の追求が人類の最上のもっともすばらしい生き方であると考えられていた。

カントにおいても美と崇高が結びついており、それが人類最高の価値だと記している。

自身の身体で美を追求し、再現前 (representation) させる行為が美容であることから、美容の対象は人体である。宇宙美容の場合もこの点は変わらない。将来人類が現生人類でなくなった場合でも、美容は人体に対して行われ、人体の美を追求し、再現する行為であるという定義は変わらない。無論、美容の手段や表現は刻々と変わり、文化によっても異なる。しかし、この美容の定義を美容の目的に置き限り、定義が変わることはないと言えよう。

現在の美容は、単に美の追求だけではない。副次的目的として、健康や快適性の追求が存在している。たとえばファンデーションには、肌を美しく見せる効果と同時に、紫外線から肌を守る効果や、保湿効果など、他の機能を持たせている。化粧品の機能を通じて、化粧品を使う人類は美と並ぶ各種の目的と効果を追求していることになる。さらに、美のほかの機能（すなわち目的）の多くは健康と快適性である。これは宇宙美容も同じである。宇宙美容の第一の目的が美であるとしても、同時に健康と快適性が求められる。特に宇宙美容の場合は、地球上の環境に適合した人類が、そのままの身体でまったく適合性のない宇宙空間に進出するため、美以上に健康と快適性が重要になると考えられる。現在までの地球上での美容は美という目的が第一で、他は二次的な目的であるのと反対に、宇宙では健康と快適性が第一の目的となり、美は副次的な目的になる可能性がかなり高い。とくに現生人類が宇宙に進出する初期段階では、技術開発が未熟であるため、美容においても健康と快適性の追求が最重要課題となる。技術開発が十分に進み、宇宙空間に快適に過ごすことができた結果、宇宙で「ふつうに」生活できるようになるか、あるいは人類が変化して現生人類

と異なる宇宙空間に適合した人類になるか、そのような次の段階に至れば、健康と快適性が再び副次的な目的になる可能性はじゅうぶんに大きい。

さて、美容の第一の目的である美は、人類が社会的動物である限り変わらないものである。他人がいる可能性のないところで美を追求することは考え難い。

人類は美という価値を認識し、想像し、創造する能力を持った生き物という特徴がある。それゆえ実に多様なものに美を見出すことのできる生き物ということもできる。雨上がりの虹に、新緑の森に、峻厳と聳える山に、駆け抜ける鹿の姿に、刻々と変化する海の波に……。人類は美を見出す対象に囲まれて生きていくこともできる。しかし、絶対に他の人間に会うことのない無人島に1人きりで存在する場合を考えてみよう。島の中や島から見えるものに無限と言ってもよいほどたくさんの美を見出すことができる。また、島にある素材を使って美を再現する創作もきる。しかし、物的な鏡だけでなく自分という存在を映す対象（鏡にたとえられるもの）もなく、他者という自分を映す鏡になる存在もない場合に、はたして自分自身の身体に美を求めらるだろうか。生存に必要な水や食料と、雨を凌ぐ住処と、暑さ寒さから身を守るようなものがあり、火も入手できて、その上危険な生き物に狙われる心配がないような、生存が容易な条件が揃っている場合に、人間は毎日毎日何もしないでいることは難しい。余暇を過ごすために（パスカルの暇つぶし）美の創造行為をすることは十分に考えられる。たしかに、美の創造の際に、自分の身体を素材にすることも考えられる。自分以外の素材を使った創作は鑑賞することが容易であるから、心理的に満たされるものがあるであろうが、自分自身を素材にした創作は、自分で見ることができ自分の

身体範囲が限られているため、かなり限界があるのではないか。しかも、それを毎日繰り返したとしても、自分以外の誰も目にすることなく毎日創作と自己鑑賞を繰り返すうちに、次第にむなしさが増していずれ放棄してしまう可能性も少なくはないのではないか。自分の身体を素材にした創作は、評価する他者が存在するからこそ意義が感じられるのであって、評価する他者が存在しない場合にどの程度意義を感じて続けることができるのか、甚だ疑問である。

無人島の例で考えたことは、人体の美は社会的なものであるということだ。それゆえ、将来の人類が、それが現行人類であっても全く異なる人類であっても、人類が社会的生物であり続ける限り、美を目的とした美容はなくなると言うことができる。

4 セルファイメージとアイデンティティ

無人島の例では、自分という存在を映すものを広義の「鏡」ととらえる可能性を示した。物理的な鏡はもちろんだが、他者もまた鏡の代表的なものだと言えよう。自身の姿や行動、発言が他者にとってどのように受け止められるのか、自身が意識するにせよ無意識的にせよ、他者という鏡に日々気遣いながら我々は生活している。広義の鏡に映して自身に跳ね返ってきたものが、セルファイメージ（自我像）の材料になっている。物理的な鏡から得られる情報と並んで、自分を取り巻く他者から得られる反応は、物理的な鏡に劣らぬほどセルファイメージにとって基本的かつ重要な材料である。このように、さまざまな情報（素材）を素材にして人間はセルファイメージを形成し、セルファイメージを大切に抱えて生きている。セルファイメージを形成できることは、人間が生きていくことにとって欠かせない重大なことである。精神医学の知見にもあるように、セルファイメージをうまく形成できないと病的な状態

になってしまう。しかし、セルフイメージは種々の「鏡」から得られた材料を使って構成した像であるため、常にゆらいで安定し続けることは難しく、しかも壊れやすい。そうした頼りにならない像であるセルフイメージではあるが、それなしに人間はアイデンティティを持って生きることにはできない。アイデンティティとは、自分が何者であるかの自己自認と言い換えることもできる。いつどこで生まれてどのように育ち、どんな性格で、好き嫌いや得手不得手、背丈は体型などの外見など、自分自身のことを自分で語ることができるのは、生まれてから現在に至るまでの「自分」というものが一貫して同じ存在であると認識しているからである。もし、一瞬一瞬の「自分」が別々の存在であるという認識ならば、自分が何者かの認識はその瞬間だけのものになるので、1秒前の私と今現在の私と1秒後の私はまったくの別人になる。それゆえこの一貫して同じ存在という認識がなければ、そもそも「自分」や「自我」という概念が理解不能になるし、成立しなくなる。しかし、一貫性を保証する記憶もまた像であり、像であるがゆえに親戚の一言によって幼いころの記憶が簡単に塗り替えられてしまうなど、セルフイメージ同様ゆらぎやすく壊れやすいものである。アイデンティティが像であるのは、アイデンティティ形成の素材がセルフイメージという像であるからだ。

さて、アイデンティティの素材はセルフイメージであり、セルフイメージの素材は各種の「鏡」から得られる像（情報）であることを記した。こうしたことから、各種の「鏡」によって得られるものは、セルフイメージの形成を通じてアイデンティティの形成や維持につながっていると言える。それゆえきわめて重大なものとだと言える。美容は自分自身のセルフイメージを自から確認し、自から操作する行為である。

美容は物理的な鏡像を自分でコントロールし、さらにコントロールの難しい他者という鏡に映した像もある程度コントロールすることができる、数少ない手段であり、しかも身近で気軽にできる手段ということが出来る。美容には、人類が文化的な生活を始めて以来今日まで途切れることなく続いてきた時間的普遍性があり、それと同時に人類が存在する場所どこにでも必ず美容があるという空間的普遍性もある。このことを言い換えれば、人類は美容なしに生きられない動物ということもできるが、その理由はここにある。像でしかない頼りなく不安定なセルフイメージとアイデンティティを確認し、補強し、修正し、コントロールしなければ、不安すぎてわれわれ人類は生きていられないからだ。

このように、美容は人間にとって欠かせないものとして存在し続けている。さらに、現生人類である限り、この美容の重大性は人類の終焉まで変わることなく続くと考えるのが、上記のことから妥当であると言えよう。

しかし、セルフイメージやアイデンティティは現生人類にとってはなくては生きられないものであっても、他の人類にとっては必ずしもそうとは言えない。こちらについてもすでに他で記しているので、ここでは繰り返さない。（注6）この論文では、現生人類の宇宙進出を想定した宇宙美容を扱っているので、生きるために必要不可欠なセルフイメージとアイデンティティに直結した美容行為は、現生人類がどのような状況下で生きようとも、何らかの形で存続し続けることをここで確認した。

5 宇宙美容についての研究と技術開発の全体像

美容の研究は実に多岐にわたる分野にまたがる学際的なものである。化粧品一つを取っても、化粧品を付ける人体の研究として、皮膚科学、毛髪科学、生理学、医学、生物学などがあり、

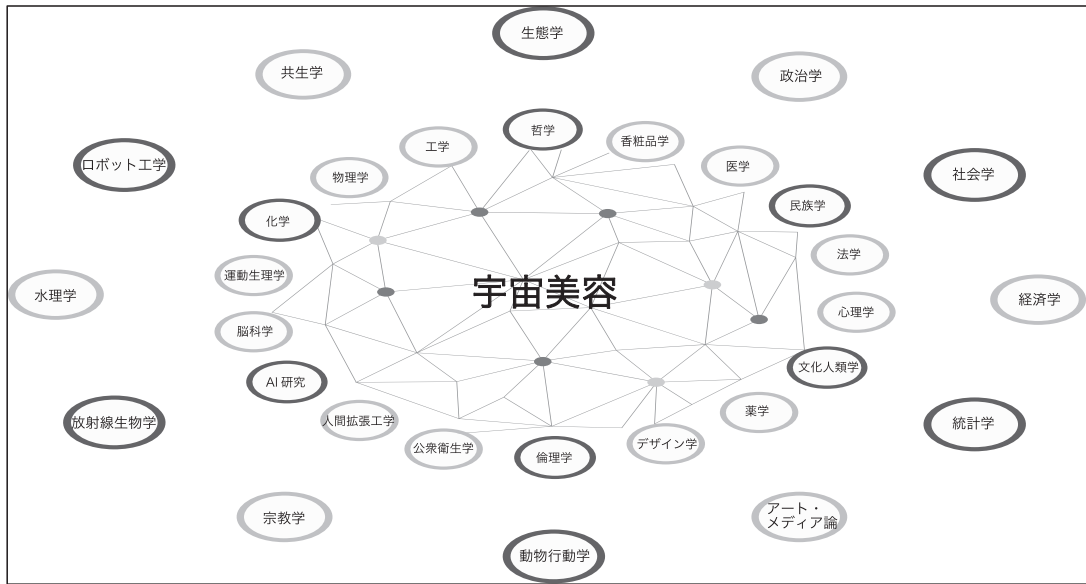


図1 宇宙美容の研究分野見取り図

化粧品成分については薬学、化学、化粧品学、生物学などがある。近年では、たとえば1996年にノーベル化学賞を取ったフララーレン構造の成分を配合した化粧品や、ヒト幹細胞を配合した化粧品は珍しくないように、分子工学や遺伝子工学などの工学系の分野も化粧品に関わっている。化粧品を開発し販売するためには経済学、商学、マーケティング、法学、社会学、心理学などが関わってくる。さらに、化粧を施した人物を表現した写真や絵画などの美術、化粧についての記述のある文学など、芸術も関わる。そもそも化粧はアート作品になる。美を追求することから美学も関わる。化粧品パッケージまで含めれば、デザインは極めて重要であるし、宣伝には映像作品などの美術が直結している。世界各地の人類の化粧を生活様式や世界観、人間関係と社会構造などから考察する文化人類学や民族学・民俗学や歴史学、社会学の研究もあり、化粧をすることによる心理的効果を探る心理学もある。筆者のように哲学的手法で美容や化粧を研究することもできる。このように、美容に

関わる研究分野は実に多岐にわたり、あらゆる分野から美容についての研究ができると言っても過言ではない。ここに宇宙美容を取り巻く研究分野の図を添付するが(図1)、ここに記載されていない分野の研究が今後加わる可能性は大きいことも明記しておく。

20世紀終盤に、作家南博が「 Cosmetology」という語を用いて総合的な化粧研究の可能性に言及し(注7)、そこに前述のように多岐にわたる分野から化粧を研究する構想が描かれていた。しかし、残念なことに化粧に関する研究はまだ総合的なものになっていない。化粧品を製造する技術の基礎となるような化粧品学とその周辺分野が20世紀後半以降大いに発達し、現在も日本と西洋諸国がリード的立場で推進され、成果は各種の商品に反映されている。また、化粧品を使用する人体の皮膚科学を中心とする分野の研究も、目覚ましい進展は見られないものの、敏感肌や肌トラブルを抱える者の人口が増加しているため、それに対応してある程度の成果は見られる。それ以外では、1991年の日本心

理学会において「化粧心理学」という新しい分野が発足し、その後研究者が急増して多数の論文成果が挙がっていることと、社会学では卒業論文に化粧を扱う学生が増加しているくらいで、残念ながら未着手の研究分野が相当に大きい状態である。(注8)

理論上はあらゆる研究分野が美容に関わるが、現実の社会ではごく一部の分野の研究しか行われていない。しかし、製品を効率的に製造する方法や少しでも多数売れる方法などは、研究機関以外の場所で実際に日々行われているので、これらも視野に入れば、かなりの分野で美容についての研究が実施できる。

6 美容の原義

美容の中でも中心的な部分を占める「化粧」という語の原義を探ると、「宇宙」という意味に行き着く。化粧品を表す英語は cosmetics で、古代ギリシャ語の *κοσμῶς* であることから容易に想像がつくであろう。

以前、古代ギリシャ文化と古代ローマ文化の流れを組む西洋各国語の「化粧」の語源を調べようとしたことがある。始めるとすぐに大きな困難に直面したが、それは、日本語の「化粧」とまったく同じ意味範囲の語がないことであった。そこで、日本語の「化粧」の範囲と「化粧」に密接に関連する語の中で、西洋各国語の中に一定のまとまりをもって語源をたどることができない語がないか探したところ、「化粧品」(英語は cosmetics) と「身だしなみ」(toilet) の2つに絞られた。「化粧品」は古代ギリシャ語の *κοσμῶς* で、「身だしなみ」は古フランス語の *toile* で、衣類を包む布、そこから派生して化粧台カバーなどの意味の語が語源である。ここでは *κοσμῶς* という語に注目したい。

すでに記したように、古代ギリシャでは、「善美」(*καλοκαγαθία*) が全宇宙の至高の美とされ

ていた。(注5) 数学的に最大に対称性に富む閉じた系である球体は、善美の象徴であり、宇宙は完全なるものであるから球体であると信じられていた。つまり、宇宙は至高の価値である善美そのものだと考えられていたのだ。星座が考え出されたのも古代ギリシャだが、星座のように宇宙には天体が規則正しく配置され、規則正しい天体の運行が見られる。秩序に満ち溢れたものが宇宙であることから、「宇宙」と「秩序」は同義語とされて、実際同じ語で表された。それが *κοσμῶς* である。辞書で最初に登場する意味が、もっともよく使用される意味で、その語の根幹を成す意味である。*κοσμῶς* の項目では最初に載っている意味は「秩序」である。もともと *κοσμῶς* は「秩序」という意味であったところ、天文学や数学が進んだ結果、「宇宙」という意味が加わったと推察される。

さて、善美を体现するものが宇宙であることから、宇宙は究極的に美しい存在ということができる。地球や月や太陽もその一部である天体の運行する宇宙は、「大宇宙」(英語 *macrocosmos*) と呼ばれることもあった。それは、大宇宙と対になる「小宇宙」(英語 *microcosmos*) と呼ばれるものがあったからである。小宇宙とは人体のことである。そして、人体は宇宙(大宇宙)と呼応関係にあるという考え方が古代ギリシャに存在した。それゆえ、人間の病気の状態は、天体の位置関係に照合すると考えられたし、人間の運命もまた天体の位置と照合関係にあると考えられていた。このように、天文学は同時に医学でもあり占星術でもあった。こうした宇宙観があったため、化粧や美容で求めるべき美とは、大宇宙を個人の人体に映すことであった。現在の「化粧品」に残っている宇宙の名残には、このような背景がある。

英語の cosmetics の直截的な語源は、古代ギリシャ語 *κοσμῶς* の意味の中の、「飾り・美しさ」

というものである。しかしそれは、ただ単にそうした意味が *κοσμῶς* にあったから後世の「化粧品」という意味が生じたという単純なものではないことは、前述の通りである。*κοσμῶς* の中心的な意味は「秩序」である。それゆえ、たとえば雑然とした部屋を整理整頓するように、混沌としたものに秩序をつけることが「美しさ」や「飾ること」につながって行ったと考えられる。善美の感覚は、秩序抜きに語ることはできない。

このようなことから、西洋各国語の「化粧品」の原義は宇宙の秩序だった美を人体に映す表現であり、言い換えれば身体表現を通じた「宇宙との対話」ということができる。

では、日本語の「化粧品」の語源は何だろうか。日本語は長い間音声だけの言語で、文字は中国起源の漢字が奈良時代に輸入された後しか存在しないため、8世紀頃までしか語源をたどることができない。紀元前の古代ギリシャ語に比べたら、大分新しい時代が限界になる。調査の結果は次の通りである。

奈良時代に「よそほい」という語がある。現代の表記で漢字を使えば「装い」と「粧い」ということで、「化粧品」の最古の形の可能性がある。しかし、奈良時代の「よそほひ」は、旅に出る支度をすることや、戦に出る支度をすることで、化粧品に相当する用方が見つからなかった。平安時代になると、「よそほい」のほかに「けはひ」と「けそう」が化粧の意味で使われる。この3語が最も古い日本語の「化粧品」と言えるだろう。

ここで、この3語から化粧の語源、でなく、原義が明らかになるよう、拡大解釈を試みよう。「けはひ」を現代の漢字を使った表記にすれば「気配」、「よそほひ」は「装い」と「粧い」、「けそう」は「懸想」とすることができる。気配とは、はっきりと見えたり聞こえたりせず五官で

とらえることができないが、周囲に漂っていて感じるができるものである。「装い」は衣服や装身具で表すことで、「粧い」は化粧で表すこと、「懸想」は特定の相手に強く想いを懸けることである。これらの語をまとめて表せば、あたりに漂っているものを感じ取って、感じたことを自分の身体で衣服や化粧などの手段で表して、時には特定の対象に向けて強い思いを身体表現で発することになる。自分の身体表現によって自分と取り巻くものと双方向の対話をする、それが日本語の「化粧品」の原義ではないか。

たしかに、「気配」や「懸想」に結びつけることは強引だという反論が大いに予想される。それでも、日本語はもともと音声言語で文字を持たなかったことを考慮すれば、すなわち音を優先して考えれば、このような解釈も可能性としてある程度認められないだろうか。

西洋語の「化粧品」の原義は、宇宙を人体に映す行為であった。日本語の化粧の原義は、自分を取り巻くものと双方向の対話であった。自分を取り巻くものすべてとは、「万有」(英語で universe) すなわち宇宙である。西洋語も日本語も化粧の原義は、人体を通じた人間と宇宙との対話という点で共通している。

残念ながら筆者の力では他の種類の言語圏まで調べることはできなかったが、民族学の研究対象になっているような世界の伝統的な化粧の多くが宇宙観・世界観を人体で表していることから、おそらく化粧の原義が宇宙との対話や世界観の表現であることは人類共通ではないかと推察される。ちなみに、「宇宙観」も「世界観」も英語で cosmology である。宇宙の理を人体で表すことが化粧であり美容であると言えよう。美容の原義は世界的に身体言語を使った cosmology の表現ということで、この章のまとめとする。

7 宇宙美容の理念

ここまで見てきたように、宇宙美容の基本的な理論と宇宙美容全体の研究概要は、従来の美容の基本的な理論と研究概要と何ら変わらない。繰り返すが、それは、現生人類の行為である限り、行為の場が地球上であろうが宇宙であろうが、どこであっても変わりえないからである。では、宇宙美容に特異的な性質はないのだろうか。

宇宙空間は地球上の空間と性質がかなり異なるので、宇宙空間で現生人類が快適に生活するために必要な条件もまた地上とは相当に異なるものになる。宇宙空間で現生人類が快適に生活するために満たすような美容の特徴、それが宇宙美容に特異的な性質だと言える。たとえば無重力では液体は球状になり、落下も上昇もせず漂い続ける。そのため化粧水などの液体の化粧品は、地上のものをそのまま持って行くと利便性が著しく低下する。それゆえ、無重力状態で使いやすい化粧水の剤形開発や容器開発が必要になる。また、無重力かつ地上より低い気圧では体内の水分が下垂せず、宇宙に行くともくんだようになる。地上と画像通信をする場合には、この現象は容貌の価値を低下させるととらえられるので、宇宙でむくまないようにすることが美容に求められると推測される。いま2つだけ記したように、宇宙空間に現生人類が滞在する場合に生じる問題が各種存在し、その中で美容で解決できるものに対応することが、宇宙美容の特徴になる。ただし、これらのほとんどは技術的な問題であるから、解決のための研究もまた技術的なものになる。こうしたことから、宇宙美容は美容についての自然科学的研究とそれを応用した技術開発で十分だという考えが生じるのも無理はない。しかしそれだけでよいのだろうか。

理念がないところに知的好奇心だけで突き進

むことの危険性、それと並んで理念なき技術開発による有限な自然資源の搾取と破壊、そこから生じた諸問題、これらは産業革命による環境汚染の開始や、2度の世界大戦とその後の産業最優先・利益最優先による環境破壊が進展した20世紀、さらに21世紀には相次いで新種のウイルスに人類が感染し、困難な闘いを強いられているところに、2020年の新型コロナウイルスパンデミックも加わりいまだ解決の目途が立っていないこと、近年の気候変動とそれが人類の生活にもたらす莫大な被害、人新生に発する諸問題を日常生活で実感し、しかもそれを地球規模で共有している現代に生きる我々は、理念なき研究開発の問題をすでによく了解しているはずだ。こうした経験をいかして、いま草創期にあるからこそ、宇宙美容では始めに明確な理念を作り、それを宇宙美容に携わる者全員が共有する必要がある。筆者は現在、日本で初めて、世界でもおそらく初めての、宇宙美容専門の企業と社団法人に関わってさまざまな提案や活動を始めている。宇宙美容の一端を担う者としても、それと同時に哲学研究者としても、いまずぐにでも宇宙美容の理念を作成し、世界に向けて宣言し、広め、賛同と協力者を得て行くことを、社会に向けて提案する。理念があれば、自分の考え方や行為を理念に照らし合わせることで、何をすべきかと同時に、何をすべきでないか、そうしたことをそれぞれの人や企業が自ら見極めることができる。当然その理念は、人新生の時代を生き、その大きな問題を生活の中で実感を募らせているわれわれとして、当然人新生が抱える問題に対応できるような理念でなければならない。それと同時に、宇宙美容は人新生の時代だけの美容ではなく、その後の時代も続いていく（そちらの方が主流になる）と考えられるので、どんな時代にも通じる普遍的なものでなくてはならない。

筆者の提案は次のようなものである。宇宙美容の理念は美容（化粧品）の原義に基づくものが適切である。前章で見たように、化粧の原義からすれば「宇宙」と「美容」はそもそも一体だった。宇宙美容は、ただ単に、宇宙で生活する人類が美しく素敵に高評価の得られる外観になるための美容技術でもなく、ただ単に宇宙空間で健康で快適に生活するための美容技術でもない。長年地上に縛られてきた人類が宇宙に飛び出して発見した大宇宙の新たな美を、小宇宙である自分たちの身体で表現する、新しい時代の人類のコスモロジーの表現である。その中に地球も、地球上に棲息している我々一人ひとりのすべての人間も、動物も植物もありとあらゆる生物も、すべてが含まれている宇宙であるからこそ、その宇宙に対する畏敬の念を中心に据えて、畏敬の念を宇宙観として人体に表現する。「宇宙に対する畏敬の念を含んだ宇宙美を人体表現」これが宇宙美容の理念である。

この宇宙美容の理念を木の幹に例えれば、幹から伸びた無数の枝は技術的な研究開発のそれぞれの系統である。その枝の先にはたくさんの葉と花と実がある。それらが品物であったり、ヘア&メイクの表現であったり、歯磨きや洗顔も含めた1つ1つの美容行為であったり・・・というイメージである。人類のさまざまな文化に共通する宇宙観（世界観ともいう）の表現として、宇宙樹あるいは生命樹と呼ばれる表現が世界中に散見される。まさに宇宙樹のイメージである。

古代の人類は宇宙が身近なものだった。意識の中に宇宙の居場所があって宇宙と共に生きていた。美容や化粧の原義を探るとそうしたことがわかる。また、自分の住む宇宙を樹木のイメージに例えた表現は、絨毯やテーブルクロスや皿、水差し、壁の柄、神を迎えるために家の前に毎朝描く砂絵、そして体に描く模様など、日常生

活の至る所にあった。しかしそうしたものは次第に忘れ去られてしまったり、古臭く非科学的で蒙昧なものだと捨て去られてしまったりした。とくに産業革命以降の近現代の技術文明とその産物に囲まれた人工的な空間に人類が閉じこまるようになってからは、忘却と意図的な廃棄が顕著に進んだ。それから何千年か後の現在、宇宙技術の開発が進み、ようやく古代の人類が共通に持っていた美容の原義や宇宙観の表現の真の意義に、科学技術や社会や人々の意識が到達し、再発見しかけたところなのかもしれない。宇宙と宇宙の一部である自然の一員である人類が、自分の由来を忘れて生きていることの問題点に、いまようやく多くの人が気づき、共感し、行動を変えようとしている。宇宙美容はこうした人類の意識と行動と共にあり、そこから生まれたものである。だからこそ、人新生と同じ過ちを繰り返して人類が自分自身や自然も巻き込んで滅亡させぬよう、希望の持てる未来を切り開いていくために、宇宙美容は美容の原義を忘れてはいけない。

また、言うまでもないことだが、軍事技術や戦争に資する研究・開発をしないことも、宇宙美容の理念に欠かせないことである。美容と軍事は絶対に結びつかないもので、軍事国家の時代には美容は抑圧されたのではないかという反論、あるいは疑問があると考えられる。美容には平和と直結した一面が確かにあるが、それだけが事実ではない。歴史を紐解けば、美容のための研究や美容技術は、使いようによって人の支配や洗脳に使うこともできることが明らかである。全体主義や軍事国家の時代、カルト教団、戦争捕虜の教化など、美容を含めた外見支配は古くから見られる常套手段である。戦争に加えて、人の洗脳や支配に資することがないこと、人類の人権と自由を守ること、これも宇宙美容の理念には欠かせない。

宇宙美容の理念にとって忘れてはならない重要な条件はこれで終わりではない。宇宙で生活する人類は、自身の、あるいは祖先の出身地がさまざまな国や地域にわたる。自分の国や出身地を愛する気持ちは自然なものであるが、異なる地域や文化を背負う人が互いに個人としてだけでなく互いの出身地や文化を尊重し、敬愛しながら共存することは、地球上と並んで宇宙でも必要でありかつ重要であることは言うまでもない。宇宙で生活するとなると、全員が地球人、あるいは祖先が地球人であるという大きな視点に立って、協力し合って生きて行かなければならないことが、地球上に増して多くなる可能性がある。宇宙美容は人類の多様性を当の人類が尊重することに資するものでなければならない。

多様性の尊重は人類の間だけでは足りない。生物を含めたさまざまな自然の多様性もまた、地球上と並んで宇宙でも必要かつ重要であると考えられる。美容の研究・開発によって自然破壊が進み生物多様性が失われることは、地球上と同様宇宙でもあってはならない。そこで、この点も宇宙美容の理念に織り込む必要がある。美容の原義は宇宙との双方向の対話であった。宇宙には地球も他の生物も存在しているのだから、原義に沿えば、自ずと生物や地球環境も尊重することになる。

宇宙は「万有」とも言われているように、ありとあらゆるものを含むものである。宇宙への畏敬の念を持つなら、それは同時に人類だけでなくありとあらゆるものへの畏敬の念を持つことになる。宇宙美容理念の根底は「万有への畏敬の念」であることを、いまいちど強調して、宇宙美容基礎論を締めくくる。

注

1 2021年4月ISSに宇宙飛行士と物資等を運んだロケットと宇宙船は、アメリカの実業

家イーロン・マスクが作った企業スペースエックス社が制作した。2021年7月12日には、米国最大手航空会社ヴァージン・ギャラクティック社が自社開発の機体により社長自らが無重力空間に出て自社が販売する宇宙旅行の初飛行を体験した。続いて2021年7月20日には、世界最大手流通企業でもあり情報インフラ企業でもあるアマゾン社の社長、ジェフ・ベゾスが、自社の宇宙企業であるブルーオリジン社が開発したロケットと宇宙船を使って宇宙旅行を楽しんだ。こちらも宇宙旅行を販売するためのデモンストラーション初飛行である。これらすべて米国の起業家と企業であるが、ロシアでもソ連時代から存在する宇宙船ソユーズに民間人を搭乗させる商売が2021年に本格化する予定で、12月8日（日本時間）には日本人起業家2名が搭乗予定である。（この論文の原稿締め切り後である）このように、宇宙旅行はお金さえあれば体験できるようになった。今後旅行者が増加し、ノウハウの蓄積と技術開発の進展と、他の企業の参加による供給増と需要増により、宇宙旅行は40年前の日本の海外旅行程度の資金でできる身近なものになることが見込まれる。そうした意味で、この論文の執筆年である2021年は宇宙旅行元年ということが出来る。それだけでなく、月に工場を作り、生活に必要な食品ほかの品物を製造するプロジェクトも進行中であるし、月を補給基地にして火星に住む計画も実現に向けて進展している。

2 新村出編『広辞苑』第7版、岩波書店。正確には③の部分である。

3 Edward B. Taylor, "Primitive Cultur", Cambridge University Press, 1920 邦訳は筆者による。

- 「文化とは」を重要な課題として扱ったタイラーに刺激されたタイラー以降のベネディクトら複数の文化人類学者による文化の定義、および文化の定義をめぐる研究論文を探して、美容が文化の定義に該当しているか照合した。結果は変わらなかったため、代表であるターナーの説だけをここに記した。
- 4 アイスマンとは、1991年アルプス山脈の氷河で発見された約5300年前のホモ・サピエンス男性のミイラのこと。アイスマンには入れ墨があり、入れ墨の位置が現代の中医学の経穴と一致することが明らかになっている。それゆえアイスマンの入れ墨の目的は、美的要望を主とした美容よりむしろ健康であると推測されるため、美容行為の痕跡とは言い難い。
 - 5 原語は *καλοκαγαθία*「美しい」の意の *καλός*(カロス) と「善」の意の *ἀγαθός* (アガートス) から成る語。ピュタゴラス以来宇宙(世界と同義)は調和であると考えようになり、ソクラテス、プラトンやアリストテレスにも引き継がれて、人類が求める至高の価値とされた。
 - 6 未来に人類が、機械と人体、人工知能と脳が一体化したホモ・マキナリウスになる場合は、セルフイメージやアイデンティティが不要になるがゆえ美容も不要になるという結論に達した3連作の拙稿がある。この問題は特に以下の2の論文を参照されたい。石田かおり「ホモ・マキナリウスのアイデンティティと化粧」、『駒沢女子大学研究紀要第24号』、2017年
石田かおり「自我の解消」、『駒沢女子大学研究紀要第25号』、2018年
 - 7 南博「コスメトロジーへの提言」、『フレグランスジャーナル』、フレグランスジャーナル社、1996年7月
 - 8 これまで存在する化粧の研究は、世界的に、化粧品学と化粧品を使用する人体の部位(皮膚・毛髪など)の研究が大半を占めている。化粧文化研究は日本以外ではほとんど見かけない。日本の化粧文化研究団体には、1993年発足のビューティーサイエンス学会、1995年発足の日本顔学会、2005年発足の化粧文化研究者ネットワークがある。このほかに国支給の研究費用等を使った期間限定の研究活動が散見される。また、企業による化粧文化の研究機関には、1973年設立のポーラ文化研究所がある。化粧文化を含む幅広い分野の美容研究に対す研究助成機関は、1990年設立のコーセーコスメトロジー研究財団がある。日本における化粧の研究を筆者がまとめた、東京大学出版会『顔身体学ハンドブック』,2021年3月の、石田かおり「現象学的化粧論」を参照。